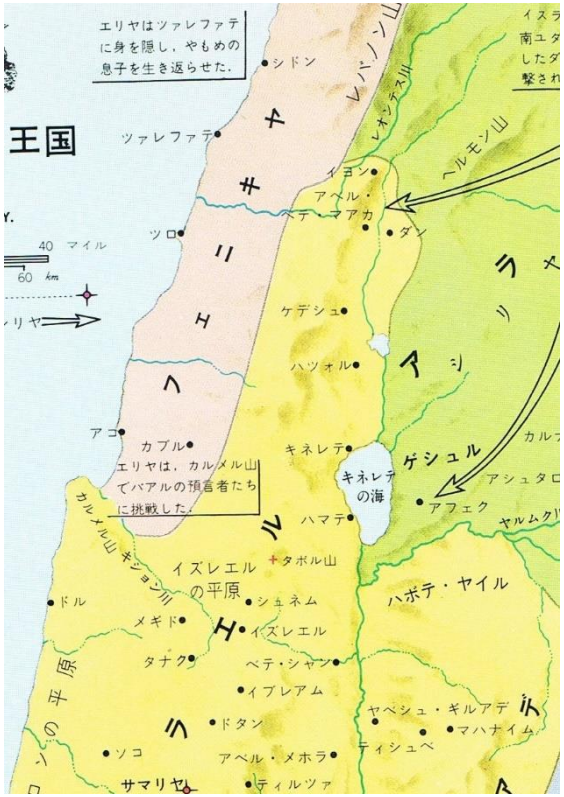


①

②

③

2020 年 5 月 10 日　説教「主を第一にして」

列王記第一 17 章 8～16 節

今朝は旧約に目を転じ、第一列王記から学んでいきましょう。

1．預言者が遣わされ（8～10 節）

①主のことば（8）**「すると、彼に次のような主のことばがあった。」**ソロモン後の分裂王国時代。北王国の不信仰な悪王アハブが治める世でした。17 章 1~8 節にあるように、預言者エリヤは、ギルアデのティシュベの出身でした。ティシュベはガリラヤ湖（キネレテの海）の南 40 キロ程の所で、ヨルダン川の東側にある町でした。(地図①参照)。それは紀元前 880 年ぐらいのことです。エリヤが住んでいた地方に雨が降らなくなってしまうという試練が訪れたのです。エリヤは示されるままに、ケリテ川のほとりに身を隠して水を得、烏からパンと肉を運んでもらい生かされました（絵図②)。ところが、その地にも干ばつがやってきて、エリヤに主からの言葉があったのです。

②ツァレファテへ（9）**「さあ、シドンのツァレファテに行き、そこに住め。見よ。わたしは、そこのひとりのやもめに命じて、あなたを養うようにしている。」**主のご指示は、フェニキヤの地にあり地中海沿いにある町シドンのツァレファテに行って住めというものでした。ツァレファテはガリラヤ湖から北西 70 キロ程の所にある町（地図①参照)。そこにひとりのやもめがいて、その人にはエリヤを養うようにと命じてあるというのです。ここまで聞けば、きっとその女性は経済的にはゆとりがあり、食べることにはまったく苦労のない人を想像します。

③ひとりのやもめ（10）**「彼はツァレファテへ出て行った。その町の門に着くと、ちょうどそこに、たきぎを拾い集めているひとりのやもめがいた。そこで、彼女に声をかけて言った。『水差しにほんの少しの水を持って来て、私に飲ませてください。」**エリヤは主の言われる通りに、ツァレファテに出て行ったのです。すると、町の門のところにやもめがいたのです。創世記に「タマルがやもめの服を脱ぎ」(38:14) という表現がありますので、服装からそれがわかったのでしょう。彼女はたきぎを拾い集めていました。たきぎ集めは炊事のためでしょうか。エリヤは出会うはずのやもめは、経済的には豊かなのでは想定していました。ところが、彼女は貧しそうです。遠慮がちに「ほんの少しの水を飲ませて下さい」と願い求めたのです。（絵図③参照）

2．エリヤとひとりのやもめ（11～13 節）

①一口のパンを（11）**「彼女が取りに行こうとすると、彼は彼女を呼んで**

**言った。『一口のパンを持って来てください。』**エリヤはこの女性が、主が言われた人であることを確かめようとしたのでしょう。彼女が水を取りにいこうとした時に、「一口のパンも持って来て下さい」とまで、今度は全く遠慮もなくお願いしたのです。

②死のうとしているのです（12）**「彼女は答えた。『あなたの神、主は生きておられます。私は焼いたパンを持っておりません。ただ、かめの中に一握りの粉と、つぼにほんの少し油があるだけです。ご覧のとおり、二、三本のたきぎを集め、帰って行って、私と私の息子のためにそれを調理し、それを食べて、死のうとしているのです。」**異邦人のやもめは、エリヤへの敬意をこめ、神を生きているとしています。ただ、現実は焼いたパンはなく、あるのは一握りの粉と、少しの油だけ。それでは、一人息子と自分のためのパンを焼いて食べるぐらいの量だけなのですと、正直に答えました。後は死を待つばかりで、とてもパンをお分けすることはできないと暗に伝えたのです。

③まず私の為に（13）**「エリヤは彼女に言った。『恐れてはいけません。行って、あなたが言ったようにしなさい。しかし、まず、私のためにそれを小さなパン菓子を作り、私のところに持って来なさい。それからの後に、あなたとあなたの子どものために作りなさい。』」**非人情、身勝手に見えても、エリヤは大胆に申し出ます。まずは「恐れてはいけない」という霊的励まし。次に彼女が予定通り、粉と油を用いてパンを作ること。但し、まずはエリヤのためにパン菓子を作って持ってくること。その後で自分たちのためにパンを作るようにと命じたのです。

３．主のおことばは真実（14～16 節）

①粉は尽きず（14）**「イスラエルの神、主がこう仰せられるからです。『主が地の上に雨を降らせる日までは、そのかめの粉は尽きず、そのつぼの油はなくならない。』」**エリヤには主の保証の言葉が与えられていたのです。つまり、地上に主が雨を降らせる日まで、かめの粉もつぼの油もなくならないという、ものでした。使えばなくなるはずですが、信じて使えばなくならないというものでした。

②長い間食べ（15）**「彼女は言って、エリヤのことばのとおりにした。彼女と彼、および彼女の家族も、長い間それを食べた。」**。彼女は、エリヤにパン菓子を作って持っていきました。にもかかわらず、彼女と息子、その他の家族も、長い間それを食べることできました。

③主のことばのとおり（16）**「エリヤを通して言われた主のことばのとおり、かめの粉は尽きず、つぼの油もなくならなかった。」**主のことばは預言者エリヤを通して伝えられましたが、それは真実であり、女のうちのかめの粉は尽きることがなく、油もなくならなかったのです。

《結論》

列王記は老いを迎えた信仰者ダビデが生きている間にソロモンを王にすることを決めることに始まります。やがて、ダビデは命を終え、ソロモン王の時代となりました。彼は国を整え、知恵者として用いられました。神殿を建設し、礼拝の要である聖所も設けられました。献堂式は人間の力を越えた神に栄光を帰す信仰が告白されました。しかし、40 年にわたるソロモン王の後、国は二つに分かれ、北王国はヤロブアムが、南王国はレハブアムが治めるようになります。レハブアムは当初信仰によって歩みますが、やがて偶像礼拝に屈します。南のヤロブアムは当初より偶像礼拝を制定するほどでした。北王国はバシャ、エラ、オムリ、アハブ王と続き、不信仰がはびこりました。エリヤが働いたのはアハブの時代です。

さて、預言者達は立てられて、世の王達の不信仰を正す役割を授けられました。しかし、為政者たちはなかなか耳を貸しませんでした。今ここに立てられたエリヤは預言者のなかでも特別でありました。イエス・キリストが姿変わりをされた時に、ペテロは三つの幕屋を作ると言い、一つはイエスに、一つはモーセに、もう一つをエリヤのためにと言っていることが思い出されます（マタ 17:4）。バプテスマのヨハネが、ユダヤ人から、「あなたはエリヤか？」と問われたことがありました（ヨハネ 1:21）。エリヤはそれほどに、イスラエルの人々に覚えられた預言者でした。エリヤが干ばつでケリテ川のほとりで過ごしたのは、預言者としての主のご訓練であったのでしょう。直後は異邦人の町に行き、一人のやもめと関わりました。とてもローカルの働きでした。ここで、第一に、エリヤ自身が主のご命令に率直に従うという信仰が試されています。それは、アブラハムが従うことを求められたことに似ています（創世記 12 章）。第二にエリヤはツァレファテのやもめのところに行きます。彼が女に告げたことは、彼女がエリヤにではなく、主への信仰により、御言葉に聞くかどうかを問うものでした。つらい任務でした。人間エリヤとしては、非情とも思えても、、貧しい女に言わねばなりませんでした。わずかな粉と油を用いて、まずはエリヤ自身のためにパン菓子を作らせるという、自分勝手な命令だと思えることを行わせたのです。しかし、それは女の信仰をためすものでありました。「神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます」（マタイ 6:33）とあります。このやもめは、自分たちの命を後に

して、主の御言葉に従いました。その結果、やもめは尽きない粉と油を得ることができたのです。困難な時を生きる私達ですが、主を第一に求めたいのです。家庭礼拝でも、オンラインでも、すべての聖徒とともに主の前に礼拝をささげていきましょう。